

総務省や内閣府の最新の統計（2015年発表）によると、全国民のスマホ所有率は6割以上。中学生こそ36%ですが、高校生となると87%に及び、ほとんどが「LINE」や「facebook」などのSNS（ソーシャル・ネット・ワーキング）機能を使っています。この調査は前年の実態ですから、恐らく現在ではさらに高い数値になっていることでしょう。スマホで情報を得る、誰かと交流するという現象は、今や日本社会ではごく日常的な光景になってきています。それだけに、今回の論説文のテーマ「SNSの影響の中で」は中高生にも分かりやすい身近な存在だったのでしょうか。多くの人が実体験を織り交ぜながら、自分の身の回りの問題としてSNSにかかわる論説をまとめてくれました。

中でも最優秀賞に輝いた「豊かさとは何か」は、ちょっと意表を突いた、論説文っぽくない論説文でした。「直線の線路の上を静かに走る夕方の各駅停車。……」から始まる書き出しは、「これ論説文？ 創作文では」と思わせる内容です。しかし、読み進むうちにこれが論説文には不可欠な「自分の体験」であることが分かってきます。夕方の混雑する電車の中で、ほとんどの人がスマホの画面に夢中になり、窓の外に広がる美しい夕焼けに気づいていたのは私と新聞を片手に持った老人くらい。「何とも言えない悲しみを感じる光景」を描いたところで、本題である「SNS依存症」に入ってゆく、巧みな構成です。以下はLINEを始めた最近の経験から、SNSが持つ便利さと魅力を指摘しながら、後半は一転して「SNSがなかった時代は？」という疑問を投げかけ、そのころのことを思い出すことができない自分と、「今の若者は機械に支配されている」ことに気づきます。さらに数年後の私は「夕焼けに感動していたことも忘れてしまうのか」……と。そのうえで本題の「豊かさとは何か」という結論に移ります。筆者にとっての豊かさは機械や技術によるものではなく、「自分の体験・経験の豊かさ」である、とまとめました。最後を「あなたの求める豊かさは何ですか」と問いかけ、押しつけがましくない論調で余韻を残したのも、好印象でした。自らの経験（失敗も含め）を述べながら、それを一つの読ませる作品としてまとめ上げた筆力はすばらしいものでした。

優秀賞の「SNSの時代」も「ねえ、フレンドになろう」という、論説文らしくない書き出しが効果的でした。前半で「アナログな付き合いからデジタルな付き合いが当たり前になったのがSNS」という主張（仮説）をまず述べ、それからSNSの定義や便利な点、一方で弊害とされる点について説明してゆきます。積極的に利用しない人に聞いた統計をもとに分類した点は面白かったのですが、こうした統計を出す場合は、情報源がどこなのか、自分の調査ならばそのことがはっきりわかるように明示したいものです。後半はアニメ好きの人たちの中から生まれた「リア充」とそれに反する「非リア」という言葉を使いながら、「世の中はアナログのコミュニケーションを疎かにして成り立つことはできない」「必要なことはメリット、デメリットを把握してSNSと共生すること」という私の結論

に導きます。中1とは思えない勢いのある、コンパクトにまとまった作品でした。

奨励賞の「SNS中毒の沼」は、まずはタイトルが効果的でした。映画や本などもそうですが、まずはタイトルをどうするか。読者を引き付けるインパクトのあるネーミングは重要です。まず、東京都のデータで小中学生の携帯電話の所有率が高まっていることを取り上げ、その中の「SNS中毒」をテーマに置きました。自分自身のSNS経験はまだ薄いようですが、自撮り棒を使って撮影するマニアの観察体験などは、そうそう、とうなずいてしまいました。私の経験としての「5日間完全に携帯と離れる臨海学校」も楽しい。そして中毒の沼に沈まないために「楽しい会話をする事」の大切さを訴えます。まだ中2ですが、これから実体験が出てくると、さらに具体的な内容が書けるでしょう。期待しています。

このコンクールはテーマに関する自由度がかなり広いので、いろいろな書き方の作品が集まってきました。比較的、論説文らしくない論説文が目をついたのもそのためですが、今後みなさんが大学や社会人に向けての入試・採用試験などで求められる論説文の中にはかなりテーマを限定したものもあるはずです。そうした論説文の時は、今回のような小説的な表現はマイナスととられることもあるので、注意しましょう。要は出題者が何を求めているかをまずは考え、許された範囲の中で、出題者の関心をうまくとらえる手法を使えば効果的なのです。まずは「敵を知ること、見抜くこと」ですね。